Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-02

自閉的精神病質児（die autistische Psychopathie nach Asperger,H.）の追跡研究

大植，正俊

(Degree)
博士（医学）
(Date of Degree)
1977-08-17
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙0494
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2000494

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

〔31〕

氏名・(本籍)	大植正俊（おおうえまさとし）　(兵庫県)
学位の種類	医学博士
学位記番号	医博ろ第419号
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位授与の日付	昭和52年8月17日
学位論文題目	**自閉的精神病質児（Die autisticshe Psychopathie nach Asperger, H.）の追跡研究**
審査委員	主査　教授　黒丸正四郎 教授　松尾　保　　教授　馬場茂明

論文内容の要旨

1943年，米国の児童精神医学者 Kanner, L. が「情緒的接触の自閉的障害」"Autistic Disturbances of Affective Contact" の題目の下に，既に1—2才から極度の自閉性を示し，特有の人格発達をとげた11名の症例を報告し，早期幼児自閉症 early infantile autism と名付けて以来，自閉症の疾病概念が流布されるに到ったのは衆知の事実である。当時は第二次世界大戦中で米国と欧洲との間の文献その他の交流は殆んど途絶していたにもかかわらず，1944年，オーストリアの小児科医 Asperger, H. はこれとは全く関係なく，4例の自閉的傾向を示す男児を報告し，自閉的精神病質 Die autistische Psychopathie と命名した。

以来，Kanner, L. のいう幼児自閉症と，Asperger, H. の自閉的精神病質との異同についていろいろ論議されてきたが，例えば van Krevelen, A. D. などは，前者は疾病概念としても進行性の病的過程 process であるのに対して後者は一つの性格偏倚 character anormaly であり，症状の上でも，前者は1—2才という早期発病で，言語がなく（乏しく），対人関係においても互いに視線が合わないほど疏通を欠き，認知能力，知的能力も劣るのに対して，後者は5—6才以上になって始めて発見される。男児に多く，言語を有し，知的能力にも優れ，ただ対人的に共感性 sympathy を欠き，直観力が劣るにすぎないとして区別している。我国でも，牧田，黒丸，岡田等多くの児童精神医学者が同様に両者は別の類型に属するものであろうとしているが，今日に到るまで，前者の追跡研究と予後調査はあっても，後者すなわち，自閉的精神病質については詳細な病状を追った追跡研究と予後判定がないため，病態の全貌が明らかでなかった。幸い著者は従来から症例数が稀有とされている本症の典型的な5例について，短いものは7年，長いものは13年間にわたって追跡研究を行ったので，これを基に本症の病態の本質に寄与した。

1. 症　　例

症例　1.　Y.H.♂　昭和35年生れ。17才。

既に乳幼児期から対人的接触と，共感性に乏しくて17才になった。ところが，「もの」に対しては1—2才で自動車，アンテナ，水の流れといった「もの」の Gestalt に興味を示し，3—4才で看板やカレンダーの文字を一つの Sign として興味の対象とし，例えばカレンダーの曜日と日付を操作するうちその因果関係を知り，日付を問うと直ちに曜日を言い当てるようになった。学童期になると数とその計算に熱中しだしたが，数をただ Sign として認識するだけで Symbol としては理解出来ないため日常必要な勘定は全く不能であった。この傾向は長ずるにつれて，全てについて形式論理を固執する思考癖となり，学校卒業後はそのため現実生活に対する弾力性ある適応をも困難にする結果となった。そのため17才となって知的能力の減退，人格の退行が露呈されるに到った。

症例　2.　Y.I.♂　昭和36年生れ。16才。

既に2才にして時計，文字，ローマ字に天才的な記憶を示し，英語の綴り，カレンダーの日付と曜日の対応に興味をもって操作するうち学童期には因果関係から形式論理に熱中するに到った。そして長ずるに従いかかる強直した論理は現実に通用しなくなって人格の退行を示すに到った。

症例　3.　A.S.♂　昭和36年生れ。16才。

2—4才で漢字，ローマ字の Gestalt に興味をもちはじめ，その順列，配列を操作するうちに文字や物品の強直した定義づけから形式論理の固執が始り今日に到っている。対人的共感性に乏しく，人格の退行が露呈している。

症例　4.　K.S.♂　昭和28年生れ。23才。

幼少の頃から「もの」の Gestalt に興味をもち，学童期に入ると，「ものごと」の順序，配列の型式に極度のこだわりを示し，長じても弾力性のある思考が出来なくなったため，現在でも高 I.Q を保持しておりながら現実生活には適応してゆけない。

症例　5.　T.K.♂　昭和40年生れ。12才。

乳幼児の時から水の沸騰，アイスクリームの溶解などの如き単純な因果関係の追求にのみ興味を集中していたが，学令期になっても文句や文章の構造の形式的論理にのみ固執し現実の学習や生活は著しく低下した。現在もテストでは高 I.Q を保持しながら人格の退行がみられる。

2. 結　　論

以上のような追跡調査から次のことが考えられる。

1)　自閉的精神病質児全例において，幼年期から青年期に到るまで，対人的接触に乏しく，自己本位で他を顧みることがなく，対人的に共感性が著しく乏しいといえる。

2)　全例において，既に幼年期から一般児のように，玩具，人形，動物などに興味がなく，特殊な「もの」（例えば自動車，数字，文字，図形など）の Gestalt に興味を限定する。やがて年令が進むと，単なる Gestalt でなく，記号 Sign の意味に興味を集中し，記号を操作するうちに（例えば，数字の計算，カレンダーの日付と曜日の対応など），単純な因果関係に興味を移し，学令期になるとかかる因果関係を基とする形式的論理に没頭するようになる。そして患児の思考の全てはかかる頑迷な形式論理の支配

するところとなり，限局された興味対象にのみ深く没頭するため，その面ではあたかも天才的であるかの如き印象を与える。

3） 学校卒業後，社会生活に入ると，生活の現実はかかる頑くなな論理では適応出来なくなるので，破綻を来し，思考力の減退，人格の退行がみられるようになる。

4） この自閉的精神病質は疾病論的には Robinson, F. のいう興味限局児と近似の類型であり，自閉症群の中でも特異な一類型と考えてよい。

5） 本症の治療は患児に特有な心理を基にした教育にあると考えられる。

論文審査の結果の要旨

〔研究の目的〕

1943年米国の児童精神医学者 Kanner が乳幼児時代から極度の「情緒的接触の自閉的障害」を示す一群の患児を発見して，早期幼児自閉症（early infantile autism）と命名したことは有名である。ところが，当時は第二次世界大戦中で欧米間の学術的交流が殆んど途絶していたにも拘らず，これとは全く独立して，1944年，オーストリアの Asperger, H. が，4例の自閉的性格を示す男児を報告し，自閉的精神病質（Die autistische Psychopathie）と名付けた。

以来，この両概念の異同について，いろいろと論議された。例えば Van Kraevelen, A. D. などは Kanner, L. のいう早期幼児自閉症は進行性の病的過程であり，症状の上でも，1—2才という早期発病で言語に乏しく，対人関係でも互いに視線が合わないほど疏通を欠き，認知能力，知的能力も劣るが，Asperger, H. の自閉的精神病質は，5—6才になって発見される性格偏倚であり，男児に多く，言語を有し，知的能力にも優れるが，ただ，対人関係において共感性を欠き，直観力が劣るにすぎないとして両者を区別している。

我国における諸学者の意見もほぼこれと同じであるが，今日に到るまで，早期幼児自閉症についての追跡研究はあるが，自閉的精神病質児についての詳細な追跡研究がみられない。そのため，本症についての病態の本質が未だに明らかでない。著者はこの点に着目し，症例数が稀有とされている本症の典型的な5例について，短いものは7年，長いものは13年にわたって，自ら観察と治療を通じて追跡研究を行った。

〔症例研究〕

症例 1. Y.H.♂ 昭和35年生れ。17才。

既に乳幼児期から対人的接触に乏しかった。ところが「もの」に対しては例えば，1—2才で自動車，アンテナなど「もの」の Gestalt に興味を示し，3—4才で看板やカレンダーの文字を Sign として興味の対象とし，それを操作するうちに，例えば曜日と日付の因果関係を知り，日付を問うと直ちに曜日を言い当てるようになった。学童期になると，Sign としての数と計算に熱中したが，それを Symbol として理解せぬため日常の勘定は不能であった。この傾向は長ずるにつれて，単純な形式論理を固執する思考癖となり，現実生活への弾力性ある適応は益々困難となり，17才の現在では人格の退行さえみられるようになった。

症例　2.　A.S.♂　昭和36年生れ。16才。

2才にして時計，文字，ローマ字に天才的な記憶力を示したが，学童期になると形式論理のみに固執し，長ずるにつれて，社会適応が困難となった。

症例　3.　Y.I.♂　昭和36年生れ。16才。

2才で漢字，ローマ字に興味をもったが，前例同様の経過を示した。

症例　4.　K.S.♂　昭和28年生れ。23才。

幼少から「もの」の順序，配列のみに固執し，同様の経過を示した。

症例　5.　T.K.♂　昭和40年生れ。12才。

乳幼児から同様の経過をとり，現在，高I.Q.ながら適応失敗がみられる。

〔結　　論〕

1.　本症は乳幼児期から青年期に到るまで共感性が乏しい。

2.　本症は幼児早期から「もの」の Gestalt に興味を集中し，やがて Sign に集中するが，Symbol としての理解がないため，Sign 操作のための単純な形式論理のみに固執するに到る。そのため興味が狭く限定されるに到る。

3.　学校卒業後，実生活に入ると，頑くなな形式論理は通用しなくなるので，適応失敗に陥り，青年期になると，人格の退行を示すに到る。

4.　本症の治療はこの心理に適した教育指導にある。

以上の如く，本研究は従来乏しかった自閉的精神病質の長年にわたる追跡研究を通して，これまで不充分であった本症の病態を明らかにしたものであって，医学博士の学位を得る資格があると認める。